

文化的自己観と高齢化に対する態度

—— 横断資料に基づく発達の・類型的把握 ——¹⁾

高 田 利 武*

The cultural view of self and attitude toward aging:
A developmental and taxonomical analysis based on cross-sectional data

Toshitake TAKATA

要 旨

相互独立性－相互協調性の年齢的变化を日本文化に於ける人格的発達と捉える観点（高田，2003）に立脚し、其れに加齢や長寿に対する態度が如何に関連しているかを検討することが本研究の目的である。青年中期から老人期に至る5つの年齢層の対象者に質問紙調査を実施し、相互独立性、相互協調性、自己評価、老人のイメージ、老人に対する態度、長寿に対する態度を類別変数とするクラスタ分析を、各年齢層毎に行った。其の結果、(1) 高相互協調性、低相互独立性、低自己評価を伴う相互協調性優勢型1が全年齢層で、(2) 高相互協調性、低相互独立性、高自己評価を伴う相互協調性優勢型2が青年前期・青年後期・若年成人層で、(3) 低相互協調性、高相互独立性、高自己評価を伴う相互独立性優勢型1が全年齢層で、(4) 低相互協調性、高相互独立性、中程度の自己評価を示す相互独立性優勢型2が青年期のみで、(5) 高相互協調性、高相互独立性、高自己評価を伴う独立性・協調性拮抗型が若年成人期以降の年齢層で、夫々析出された。老人に対する態度は(1)では否定的、(2)(4)(5)では肯定的であり、(3)では年齢と共に否定的から肯定的に変化している。長寿に対する態度は、(1)では天命・長寿双方を志向する矛盾的態度、(4)(5)では長寿志向であり、(2)(3)は基本的に天命志向であるが老人期で此の類型に属する者のみは例外的に矛盾的であった。之等の結果に基づき、人格的発達の停滞と先取に関する仮説的モデルが提唱された。

目 的

高齢化、死・生命に対する態度

本研究の目的は、現代日本社会に於ける加齢、長寿、生命や死の問題を、発達社会心理学的観点に立ち、日本文化に於ける自己の発達、乃至、人格的発達と言う側面から捉え、之を実証的に検討する事にある。

少子高齢化が未曾有の勢いで進行しつつある現代日本に於いて、之を社会問題として捉えた場合、労働市場や福祉財政の危機を齎らし、結果として世代間の対立・相剋を生む可能性を指摘す
平成15年9月26日受理 *社会学部人間関係学科

る研究者もある（内田・岩淵，1999）。他方、斯かる見解は、高齢者を「弱者」「保護されるべき者」として理解する「老いの神話」に立脚し、高齢者差別の惹起に繋がる処の粉碎さるべき観点であるとし、「働いて自立して生きる」肯定的な高齢者像への問題把握角度変革を高唱する立場もある（安川，2002）。之等相対立する諸見解は、何方にせよ一定の歴史的・社会経済的背景を持つ社会的表象を扱っているのであって、其の社会に生きる個々人が——高齢者であれ若者であれ——高齢化、延いては死や生命に対して実際に如何なる態度を有しているかは自ずから別次元の問題である。此処に於いて、現代日本社会に於ける実証的資料に基づき、個人の認知の水準では高齢化や死・生命が如何に捉えられているかを闡明すると共に、其れを規定する様々な要因を検討せんとする立場も必要であろう。本研究は斯様な基本的視点に依拠するものである。

他方、死や生命に対する態度には文化に依る差が存在する事が、従来指摘されている。一例として広井（1992）は、日本と米国とを比較した場合、脳死や妊娠中絶に対する態度に顕著な相違があり、其の背景には以下の如き人間観や生命観の相違がある事を指摘している。即ち、米国文化に於いては、人間の本質は精神・思考機能、就中、脳に於ける精神的活動にあると見る故に、脳死は人の死として受け入れられ易いものに対し、日本文化では身体全体が「其の人」の命を為すと言う「有機体」論的な発想が強い為、「未だ体の温かい」脳死状態を死と見做す事への抵抗が強いと言う。斯くの如く、米国文化にあっては原理原則に則った1つのテーゼに即して判断を為す故に、妊娠中絶に関しても「胎児の生命の権利」と言う理念に沿って反対する傾向が強いが、「目に見える状況」を重視し勝ちな日本文化では、「現に其処にいる妊婦の側の止むを得ない状態」に基づき中絶を容認する傾向があると言う。斯かる日米の差は、後述する人間の自己のあり方に関する文化差に対応している部分があると思われる。

翻って、前述した如く死や生命の捉え方は社会一般に共通する問題である一方、個々人が其れを如何に認知するかと言う側面も併せ持つ。就中、死には一般的に未だ遠い青年とは異なり、現実の問題として多かれ少なかれ死に直面せざるを得ない老人が、其れを如何に捉えているかが此処で問題と成る。現代日本社会に於いては、死に就いて謂わば対極にある「飽くまで生きる」選択と「朽ち果てる」選択の何方かを自己決定して貫徹出来る高齢者は極めて少なく、「生きるのも辛い、死ぬのも怖い」と言う状態で漫然と日を過ごす例が過半である事を、小池（1993）は指摘している。斯かる自己決定を為し得るか否か、亦、自己決定が如何なる方向のものであるかは、様々な要因の交互作用に依って決せられ、個人差も亦極めて大きいと思われる。併し乍ら、其の1つとして当該個人の「自己」のあり方が存在する事は容易に示唆されよう。人間は自分自身に対して自己の認識を持つと同時に、自己は凡ゆる意志決定の主体である事を、従来の心理学的自己研究の成果は示しているからである（Baumeister, 1998）。

自己の認識は幼児期での芽生えに始まり、青年期に於ける再構成を経て一応の確立を見た後も、成人期から老人期にかけて更に発達乃至変容を続ける事が指摘されている（高田，1997；Harter, 1997）。例えば、総じて自己に対する肯定的認識を持つ反面、自己の将来に就いて冷静・否定的である事が、青年に比した日本人老人の自己の様態の特質である事を下仲（1980）は見出している。加齢と共に自己評価が上昇する傾向は、西欧に於いても一般的な傾向である事が示唆されているが（Jackson, Antonucci & Gibson, 1990）、何方にせよ、前述した生と死、或いは長寿に伴

う自己決定には、確固とした自己の認識の発達乃至は成熟を要すると思われる。而して、斯かる自己の発達乃至成熟が、単なる自己評価の高さに止まるか否かは疑問であるが、然らば其れが如何なるものであるかは現段階では未詳である。

日本文化での自己の発達

他方、自己のあり方は文化に依って根本的に異なると言う指摘がある。其の代表的見解の1つとして、Markus & Kitayama (1991) の提唱する文化的自己観 (cultural view of self) の概念がある。彼等に依れば、或る文化に於いて歴史的に作り出され、暗黙に共有されている自己に就いての前提や通念が文化的自己観であり、相互独立的自己観 (independent construal of self) と相互協調的自己観 (interdependent construal of self) の2つに大別される。前者は、自己を他者から分離した独自の実体として捉えるものであり、西欧、就中、北米中産階級に典型的である。此処では、自己は或る個人の持つ様々な特性に依って定義されるが、其れは周囲の状況とは独立なものである。後者は、他者と互いに結び付いた人間関係の一部として自己を捉える考えで、日本を含む亜細亜の文化に於いて一般的とされる。

相互独立的自己観であれ相互協調的自己観であれ、文化的自己観は、或る集団の成員に共通する価値や観念のシステムである社会的表象であり (北山, 1998)、必ずしも個々の成員の考え方や物ではない。従って、特定文化に属する個人、例えば日本人全員が一律な相互協調的自己観を持っている訳では勿論ない。併し、社会的表象は何等かの形で個人の価値や信念に反映され、個人の持つ自己の認識に影響する。茲で、人間と言う存在が個性的側面を持つと同時に社会的側面を持つ点に着目すれば、相互独立的自己観は個性的存在としての人間、相互協調的自己観は社会的存在としての人間を焦点にしていると考え得る。各々の側面を強調した捉え方が2つの自己観であると仮定すれば、所属する文化に拘わらず如何なる個人も双方の自己観に即した考え方を持つ事が出来、2つの自己観が個人に内面化された程度に依る個人差が生じる、と言う視点が成立する。

社会的表象である文化的自己観が個人の自己認識に内面化される過程を發達的に検討すべく、高田 (1999; 2001; 2002) は、相互独立的-相互協調的自己観尺度 (高田・大本・清家, 1996; 高田, 2000) を小学校高学年児童から老人に至る年齢段階の対象者に実施した横断的資料を屢次収集している。処が、日本文化に特徴的とされる相互協調的自己観が内面化されている程度、及び、之も日本人の自己認識に特徴的な自己批判的傾向は (Heine, Takata & Lehman, 2000)、高校生・大学生を中心とする青年期に最も顕著であり、成人期以降は寧ろ相互協調性は低下し相互独立性が高まると共に自己肯定的に成る、と言う傾向が一再ならず見出されている。之は、長期の社会的適応を経た成人は、文化・社会的特徴とされる価値や規範をより体現していると言う、一般的通念と一見矛盾する傾向である。

此の傾向を高田 (1999; 2002) は以下の如くに解釈している。即ち、日本文化で優勢な相互協調的自己観が個人の認知的表象に直接反映されるのが「1次的反映過程」であり、其れは自己再構成期たる青年期に主に生じる。之に対し、青年期に内面化された相互協調的自己観に規定されつつ、日本文化に於いても理解する事は可能な相互独立的自己観が個人に取り込まれるのが「2

次の反映過程」であって、成人期に相互独立性が上昇すると同時に相互協調性が一時低下する傾向は、其の一面であると理解される。従って、相互独立性の高まりと肯定的自己認識を齎す2次の反映過程は、人間の持つ社会性と個性が日本文化の枠内で統合される一種の人格的発達経過であるとも考え得るのである。

内面化の類型と人格的発達

斯くの如く、相互独立性と相互協調性の発達は、日本文化に於ける人格的発達として捉え得る。然るに、其処には個人に依り可成の差異が見られ、其の差異は幾つかの類型として把握される可能性を高田（2003）は示唆している。即ち、(1) 相互独立性が相互協調性を凌ぐと共に肯定的自己認識が顕著な相互独立性優勢型、(2) 一定程度の相互独立性と相互協調性を具備すると共に肯定的自己認識も併せ持つ独立性・協調性拮抗型、(3) 相互協調性が相互独立性を圧倒し、批判的自己認識が顕著な相互協調性優勢型、の3つの類型である。

前述した如く、相互独立性と相互協調性の発達に関する横断資料（高田，1999）に基づけば、青年期には相互協調性が相互独立性を凌ぐが、成人期、就中、中年成人に於いては逆に相互独立性が相互協調性を上回り、老人期に至ると相互協調性が再び伸張して、相互独立性と相互協調性は略同一水準に近づく。此の発達経過に即するならば、相互協調性優勢型は青年期の、相互独立性優勢型は成人期の、独立性・協調性拮抗型は老人期の、夫々特徴を最も体現した類型であると言える。

更に、成人の場合、夫々の類型に随伴する諸特性は表1の如くに纏められる事を高田（2003）は指摘している。即ち、成人期に典型的な発達相である相互独立性優勢型に属する個人には、肯定的自己認識を持つと同時に、殊に若年成人の場合、親と成った事に由来する人格的発達が顕著である。亦、老人期に特徴的な発達相であると言える独立性・協調性拮抗型に属する成人も、肯定的自己認識を持つ。同時に、殊に中年成人の場合、反自己中心的規範意識と権威主義が顕著であるが、之等は老人期に顕著な特性である（高田，1998）。他方、青年期の発達相である相互協調性優勢型に属する成人は、青年期の特徴である批判的自己認識を示すと同時に、親に成っての人格的発達、反自己中心的規範意識、権威主義の何方をも示していない。

表1 各類型の特徴

	若年成人	中年成人
相互独立性優勢型	肯定的自己認識 親と成る人格的発達	肯定的自己認識
独立性・協調性拮抗型	肯定的自己認識 親と成る人格的発達	肯定的自己認識 反自己中心的規範意識 権威主義
相互協調性優勢型	批判的自己認識	批判的自己認識

之等の事実に基づくと、相互協調性優勢型に属する成人は、成人期に至るも未だに青年期的特性を残した、発達が停滞した者と捉え得る。同様に、相互独立性優勢型に属する個人は成人期の典型的発達相にある者、独立性・協調性拮抗型は老人期の発達の特性を先取りしている者、と理解する事が可能であろう。斯様に、文化的自己観の内面化過程に関して、其の発達段階の個人差を示す幾つかの類型が存在する可能性を高田（2003）は提唱しているが、此の推論は成人期の資料のみに基づくものであり、青年期や老人期に於いても之等の類型が認められるか否か、亦、其の人格発達の含意が上述の如き理解に沿うものであるか否かは未詳である。

一方、加齢・高齢化、或いは死や生命に対する態度は、相互独立性－協調性の内面化に基づく人格的発達と如何なる関係を有するかも未詳であると同時に、斯かる人格的発達の背後にある心理的機制に関しても現段階では不分明である。更に、前述した如く生命や死に関する認知には文化差があり、且つ、生死に関する自己決定の如何を決する要因として自己の発達乃至成熟があるとするならば、日本文化に於ける人格的発達の程度を示す可能性のある斯様な類型は、加齢、生死の認知や自己決定とも密接に関連している事が考えられよう。

斯くの如き背景に基づき、本研究は以下の点に就いて横断的実証資料に依り発達の観点から検討する事を目的とする。即ち、(1) 文化的自己観の内面化過程と自己認識、就中、自己の肯定的認識との関係に就いて、従来の知見を追試すると共に拡大する、(2) 文化的自己観の内面化過程と加齢・長寿或いは生死に対する態度との関連を検討する、(3) 文化的自己観の内面化に基づく人格的発達と言う観点から、上記(1)(2)を総合的に検討する、の3点である。具体的には、青年中期、青年後期、若年成人期、中年成人期、老人期の5つの年齢層の対象者に、高齢者、長寿や死に対する態度、相互独立性－協調性、及び自己の肯定的認識の程度に就いての諸指標に就いての質問紙調査を実施し、夫々の発達の变化を吟味すると同時に、各々の指標を総合し対象者を類型化して捉える事を通じて、文化的自己観の内面化の視点から人格的発達に就いて更なる示唆を得る事を試みる。

方 法

調査対象者

以下の5つの年齢層に属する合計1012名の対象者に質問紙調査を実施し、其の内、本研究の分析で用いた全質問に対し完全なる回答を行なった、以下の合計969名を分析の対象とした。

1. 青年中期層：234名（男性166名、女性68名）、平均年齢18.1歳。
2. 青年後期層：139名（男性68名、女性71名）、平均年齢20.0歳。
3. 若年成人層：91名（男性34名、女性57名）、平均年齢35.2歳。
4. 中年成人層：353名（男性178名、女性175名）、平均年齢49.0歳。
5. 老人層：152名（男性83名、女性69名）、平均年齢69.0歳。

此の内、1. と 2. は関西の某私立大学の学生である。1. は新入生で入学式の直後に調査を行った処の、高田（1999）等の知見での高校生に略相似の年齢の者であり、青年中期層として扱

った。2. は2年生以上の学生であり、講義時間に調査を実施した。3. は関西の私立某幼稚園園児の保護者に、担任教師を通じて調査票を配布した。4. 5. に就いては、首都圏の公立某高校卒業生（回答率32.0%）、及び、関西の私立某大学学生の保護者（回答率67.8%）に調査票を郵送し、返送のあった個人の内、40・50歳代の者を4. 60歳以上の者を5. とした。更に、5. に就いては、関西の某私立大学の学生の当該年齢層の縁者に対し個別に調査票を配布した。

調査項目

本稿で分析対象としたのは、高齢者や長寿・死への認知乃至態度と、自己の捉え方とに大別される以下の質問項目である。

1. 加齢・高齢化の認知：以下の4領域から構成される。
 - 1) 老人の定義：何歳以上の人を指すか、具体的な年齢の記入を求めた。
 - 2) 老人のイメージ：「物知りな」「頑固な」等、表3に示す38個の形容詞を用いた両極性7段階評価を求めた。
 - 3) 老人への態度：表5に示した10項目を用い、7段階評価（7＝非常に賛成、1＝全く反対）を求めた。
 - 4) 長寿への態度：表7に示した6項目を用い、7段階評価（7＝非常に賛成、1＝全く反対）を求めた。
2. 自己の捉え方：文化的自己観の内面化の程度と、自己に対する肯定的認識に関する諸指標から成る。
 - 1) 相互独立性－協調性：高田・大本・清家（1996）に依る尺度の短縮版（高田，2000）を用いた。相互独立性は4項目、相互協調性は6項目から成り、夫々7段階評定（7＝非常に当て嵌まる、1＝全く当て嵌まらない）を求めるものである。
 - 2) 肯定的自己認識：「周囲の人と旨くやっている」「自分の人生は之で良かったかと悩んでいる（逆転項目）」の2項目に対し、7段階評定（7＝非常に当て嵌まる、1＝全く当て嵌まらない）を求めた。
 - 3) 肯定的自己認識の源泉：肯定的自己認識－自己高揚傾向の背後には、自己認識に係わる種々の心理的機制が作用している事に就いては、従来多くの指摘が為されているが、本研究に於いては、(1) 他者との比較に於いて自己高揚を図る社会的比較（高田，1992；Wills, 1991；Wood & Taylor, 1991）、(2) 過去或いは将来の自己と現在の自己との比較に於いて自己高揚を図る継時的比較（Albert, 1977；Wilson & Ross, 2001）の観点から、以下の3種の測定指標を用いた。
 - (1) 老人と成る年齢の予測：自分が老人と成るのは何歳頃かに就いて具体的な年齢の記入を求めた。之に依り、既に述べた老人の定義に就いての質問の回答と対比し、他者＝老人一般との比較に於いて自己高揚を図る傾向を見る。
 - (2) 自己イメージ：前述した老人のイメージに就いての32個の形容詞を用い、夫々が自分にどの程度当て嵌るか、7段階評価を求めた。之に依り、老人一般との比較に於いて自己高揚を図る傾向を見る。

- (3) 過去と将来の評価：自分の人生には「よい事」と「悪い事」の何方が多いかに関し、過去と将来に就いて各々11段階評価（+5 = よい事が多い、0 = 半々、-5 = 悪い事が多い）を求めた。之に依り、継時的比較に依る自己高揚の程度を探る。

結 果

加齢、高齢者認知の年齢変化

1. 「老人・高齢者」の定義：一般に何歳位から「老人」「高齢者」であると思うかに就いての回答の各年齢層・性別毎の平均値は、表2に示す如くである。1要因分散分析の結果、年齢段階の平均値間の差は有意であり（ $F(4,959)=50.50$ $p<.0001$ ）、多重比較に依れば（HSD検定、 $p<.05$ 。以下同様）若年成人と中年成人との間に差が無い以外は、各年齢層間に有意差がある。従って、年齢が高く成るに従い一般に老人と思う年齢は上昇している²⁾。

表2 「老人」になる年齢の評価の平均値

		青年中期	青年後期	若年成人期	中年成人期	老人期
一 般	男性	63.69 (5.10)	64.97 (5.12)	67.50 (5.67)	66.67 (4.54)	69.28 (4.12)
	女性	63.16 (3.85)	64.69 (4.59)	67.46 (4.54)	67.69 (4.50)	70.90 (4.66)
	全体	63.52a (4.76)	64.79b (4.84)	67.47c (4.97)	67.18c (4.54)	70.01d (4.44)
自 分	男性	62.14 (7.77)	63.87 (6.99)	68.38 (5.74)	67.53 (4.85)	71.47 (4.69)
	女性	63.26 (6.29)	65.58 (8.58)	67.28 (5.09)	69.07 (5.01)	71.75 (4.84)
	全体	62.45a (7.36)	64.71b (7.85)	67.69c (5.34)	68.29c (4.98)	71.60d (4.74)

()内は標準偏差。異なるアルファベットを付した年齢層間には5%水準の有意差がある。

2. 老人のイメージ：22の形容詞に対する回答に就いて、全調査対象者を一括した因子分析を実施した結果（主因子解、バリマックス回転、累積寄与率45.3%：表3参照）に基づき、(1)「活力」（第1因子、健康な、元気な、明るい、充実した、等）、(2)「知恵」（第2因子、役に立つ、物知りな、優れた、等）、(3)「厄介」（第3因子、口五月蠅い、頑固な、欲張り、気が短い、等）、の3因子を解釈した。次いで、各因子に含まれる形容詞の評定値の平均を算出し、各イメージ評定値とした。夫々の α 係数は、「活力」=0.73、「知恵」=0.81、「厄介」=0.71で、各評定値の信頼性は何方も基本的には問題はない。

各イメージ評定値の年齢層・性別毎の平均値を示したのが表4である。年齢段階（対象者間要因）×イメージ（対象者内要因）の分散分析に依れば、年齢段階×イメージの交互作用が有意で

表3 老人イメージ形容詞の因子分析

	因子1	因子2	因子3	h ²
健康な-加減の悪い	.67451	.09766	.02079	.46493
充実した-空しい	.64757	.29244	-.02217	.50537
幸せな-寂しい	.63923	.04440	-.03302	.41168
明るい-暗い	.63336	.35320	-.08117	.53248
強い-弱い	.63323	.20686	.04020	.44539
元気な-草臥れた	.62221	.09078	.10421	.40625
気さくな-気難しい	.41025	-.18851	.36301	.33561
物知りな-物を知らない	-.11802	.73010	-.08398	.55403
尊敬される-馬鹿にされる	.16808	.70288	-.13194	.53970
優れた-劣った	.31527	.65118	-.07033	.52837
余裕の有る-余裕の無い	.31847	.53764	.02666	.39119
役に立たない-役に立つ	.19424	.51417	-.10997	.31420
頼りない-頼り甲斐のある	.22608	.51330	-.10381	.32537
自信の有る-自信の無い	.46392	.49532	.09868	.47031
安定した-不安定な	.41723	.44353	-.01220	.37094
洗練された-野暮ったい	.35648	.42455	-.22555	.35819
口五月蠅い-人に干渉しない	-.10891	.22033	.73675	.60321
凶々しい-控えめな	.14775	-.20619	.69650	.54945
頑固な-頑固でない	-.19150	.30605	.65634	.56113
欲張り-欲が無い	.29329	-.27023	.62227	.54626
気が短い-気が長い	.13322	-.25056	.54899	.38191
穏やかな-厳しい	-.15366	-.30126	.49856	.36293

表4 老人イメージの平均値

		青年中期	青年後期	若年成人期	中年成人期	老人期
知 恵	男性	4.47 (0.79)	4.73 (0.74)	4.13 (0.95)	4.35 (0.68)	4.38 (0.67)
	女性	4.65 (0.77)	4.48 (0.83)	4.26 (0.68)	4.37 (0.78)	4.20 (0.96)
	全体	4.52a (0.79)	4.59a (0.80)	4.21b (0.79)	4.36b (0.73)	4.30b (0.82)
活 力	男性	3.86 (1.03)	3.99 (0.83)	3.76 (0.88)	4.22 (0.94)	4.25 (0.82)
	女性	4.05 (0.89)	3.77 (0.90)	4.12 (0.89)	4.10 (0.90)	4.17 (1.17)
	全体	3.92a (0.99)	3.86a (0.89)	3.99a (0.89)	4.16b (0.92)	4.21b (0.99)
厄 介	男性	3.89 (0.90)	3.79 (0.65)	4.18 (0.88)	4.06 (0.76)	4.23 (0.64)
	女性	4.09 (0.94)	3.94 (0.86)	4.23 (0.71)	4.35 (0.75)	3.94 (0.79)
	全体	3.94ac (0.92)	3.86a (0.77)	4.21b (0.77)	4.21b (0.77)	4.10b (0.72)

()内は標準偏差。異なるアルファベットを付した年齢層間には5%水準の有意差がある。
数値は5段階評定値(5~1)。表5、表7、表11を除く以下の表についても同様。

($F(8,1932)=8.01$ $p<.0001$)、イメージの如何に依って年齢段階に依る変動は異なっている。各イメージ毎に年齢間の相違を検討した結果、何方のイメージでも年齢段階の主効果は有意であった(知恵： $F(4,966)=5.81$ $p<.0001$ 、活力： $F(4,966)=5.04$ $p<.0005$ 、厄介： $F(4,966)=7.33$ $p<.0001$)。多重比較(HSD検定)の結果を併せ考慮すると、「知恵」は青年(中期・後期)と成人以降(若年成人・中年成人・老人)の間に有意差があり、前者は後者よりも老人に対し「知恵」イメージを持っている。「活力」に関しては、青年(中期・後期)と中年成人以降(中年成人・老人)の間に有意差があり、後者は前者よりも「活力」イメージを持っている。「厄介」に就いては、青年(中期・後期)と成人(若年成人・中年成人)の間に有意差があり、後者の方が「厄介」イメージをより持っている。亦、青年後期と老人期の間にも有意差があり、後者は「厄介」イメージをより持っている。亦、各年齢段階毎に3つのイメージ評定値を比較した処、青年中期($F(2,468)=36.34$ $p<.001$)と青年後期($F(2,278)=39.72$ $p<.001$)ではイメージ間の相違が有意で、「知恵」イメージが他より高いのに対し、若年成人($F(2,180)=2.17$)、中年成人($F(2,704)=1.83$)、老人($F(2,302)=2.37$)では、イメージ間の差は何方も有意ではない。

以上纏めれば、総じて青年中期・青年後期では「知恵」のイメージが強く「活力」と「厄介」のイメージが相対的に弱い、成人期以降は3つのイメージが同程度に持たれている。成人期以降は「知恵」イメージは弱まり、「厄介」イメージは強まる一方、「活力」イメージは寧ろ年齢と共に上昇すると言える。

3. 老人に対する態度：10項目の回答に対して、全調査対象者を一括した因子分析を実施した結果(主因子解、バリマックス回転、累積寄与率59.2%：表5参照)、(1)「受容」(第1因子、尊敬すべきだ、多少の我儘は認めるべき、労るべき、見習う点が多い)、(2)「引退」(第2因子、共通の話題が無い、アドバイスは役に立たない、口出しすべきでない)、(3)「迷惑」(第3因子、弱者である、社会に迷惑を掛けている、老人福祉は若い世代の犠牲で成り立っている)、の3因子を解釈した。次いで、各因子に含まれる項目の評定値の平均を算出し、各態度評定値とした。夫々の α 係数は、「受容」=0.66、「引退」=0.67、「迷惑」=0.60で、老人イメージの場合に比すと稍問題が残される。

表5 老人に対する態度項目の因子分析

	因子1	因子2	因子3	h^2
尊敬すべきである	.76422	-.27714	-.06642	.66526
労るべきである	.75401	-.10471	-.08008	.58591
我が儘を受け入れるべきだ	.69487	.09357	-.03566	.49288
見習うべき点が多い	.61599	-.40192	.07734	.54697
アドバイスは役に立たぬ	-.20736	.75142	.18781	.64290
若い人に口出しすべきでない	-.00540	.75103	.03332	.56518
共通の話題は無い	-.13647	.65493	.27013	.52053
若い世代の犠牲で老人福祉	-.22862	.03342	.78867	.67539
社会の迷惑である	-.31548	.34906	.67416	.67586
「弱者」である	.26661	.18767	.66481	.54827

各態度評定値の年齢層・性別毎の平均値を示したのが表6である。年齢段階（対象者間要因）×態度（対象者内要因）の分散分析に依れば、態度の主効果が有意で（ $F(2,1932)=1158.70$ $P<.00001$ ）で、何方の年齢層でも「受容」の評定値が「迷惑」「引退」の其れより高い。併し、年齢段階×態度の交互作用も有意で（ $F(8,1932)=5.82$ $p<.0001$ ）、態度因子の如何に依って年齢段階に依る変動は異なっている。

表6 老人に対する態度の平均値

		青年中期	青年後期	若年成人期	中年成人期	老人期
引退	男性	2.93 (0.98)	2.79 (0.96)	2.89 (0.85)	3.06 (0.78)	3.27 (0.72)
	女性	2.64 (0.82)	2.68 (0.73)	3.04 (0.76)	3.00 (0.84)	3.40 (0.76)
	全体	2.84ac (0.94)	2.72a (0.86)	2.98bc (0.79)	3.03b (0.81)	3.33d (0.74)
受容	男性	5.11 (0.88)	5.32 (0.84)	5.05 (0.98)	5.13 (0.89)	5.09 (0.79)
	女性	5.46 (0.76)	5.32 (0.91)	4.95 (0.81)	5.02 (0.85)	5.23 (0.89)
	全体	5.21ac (0.86)	5.33a (0.87)	4.99bc (0.87)	5.08bc (0.87)	5.15a (0.84)
迷惑	男性	3.47 (1.18)	3.29 (1.14)	3.76 (0.99)	3.53 (0.91)	3.74 (0.84)
	女性	2.57 (1.16)	3.08 (1.07)	3.46 (0.98)	3.40 (0.95)	3.77 (1.21)
	全体	3.20a (1.24)	3.17a (1.11)	3.57bc (0.99)	3.47b (0.93)	3.75c (1.02)

()内は標準偏差。異なるアルファベットを付した年齢層間には5%水準の有意差がある。

各態度因子毎に年齢間の相違を検討した処、何方の因子でも年齢段階の主効果は有意であった（引退： $F(4,966)=11.84$ $p<.0001$ 、受容： $F(4,966)=3.15$ $p<.05$ 、迷惑： $F(4,966)=8.95$ $p<.0001$ ）。多重比較（HSD検定）の結果に依れば、「受容」は青年（後期）と成人（若年成人・中年成人）の間に有意差があり、前者は後者よりも老人を「受容」している。「引退」に関しては、青年（中期・後期）と成人以降（若年成人・中年成人・老人）の間に有意差があり、後者は前者よりも「引退」態度を持っている。亦、老人と他の全ての年齢層との間にも有意差があり、老人は自らに対し最も「引退」的態度を持っている。「迷惑」に就いての年齢層間の有意差は、「引退」と全く同様である。

以上を纏めれば、各年齢層を通じて老人を肯定的に見る「受容」が否定的に見る「引退」「迷惑」よりも遙かに強いが、総じて「受容」は青年期で高く、成人期以降減少する。其れとは逆に「引退」「迷惑」は青年期に低く、成人期以降漸増し、老人期に最も高まると言える。

4. 長寿への態度：6項目の回答に対して全調査対象者を一括した因子分析の結果（主因子解、

バリマックス回転、累積寄与率58.8%：表7参照）、(1)「長寿」志向（第1因子、どんな状態でも命は大切、医療技術の進歩による長寿は喜ばしい、長生きは其れ自体慶ぶべき、死は恐ろしい）、(2)「天命」志向（第2因子、徒らな延命治療は疑問、安楽死は認めるべき）の2因子を解釈した。次いで、各因子に含まれる項目の評定値の平均を算出し、長寿観評定値とした。夫々の α 係数は、「長寿」志向=0.69、「天命」志向=0.55で、殊に後者の場合、項目数の少ない事もあり問題が残される。

表7 長寿に対する態度項目の因子分析

	因子1	因子2	h ²
どんな状態でも人命は大切である	.77233	-.06625	.60088
長寿は其れ自体慶ぶべき事である	.77005	-.06639	.59739
医療技術の進歩で長寿になるのは喜ばしい	.76697	-.23197	.64205
死は恐ろしい	.56351	.01979	.31794
徒らな延命治療は疑問である	-.05574	.83714	.70390
治る見込み無いなら安楽死は権利とすべき	-.09744	.81050	.66640

各因子評定値の年齢層・性別毎の平均値を示したのが表8である。年齢段階（対象者間要因）×長寿観（対象者内要因）の分散分析に依れば、長寿観の主効果が有意で（ $F(1,966)=28.17$ $p<.0001$ ）で、何方の年齢層でも「長寿」志向の評定値が「天命」志向の其れより低い。併し、年齢段階×長寿観の交互作用に有意傾向が見られ（ $F(4,966)=2.23$ $p<.07$ ）、年齢段階によって「長寿」志向と「天命」志向の差異は異なっている。

表8 長寿に対する態度の平均値

		青年中期	青年後期	若年成人期	中年成人期	老人期
長寿志向	男性	5.16 (1.27)	4.81 (1.30)	5.11 (1.16)	5.21 (0.91)	4.94 (0.77)
	女性	5.45 (0.98)	5.10 (1.26)	5.00 (0.97)	4.95 (1.03)	4.82 (1.00)
	全体	5.25a (1.19)	4.97bc (1.29)	5.04c (1.04)	5.09c (0.98)	4.88b (0.88)
天命志向	男性	5.35 (1.22)	5.23 (1.44)	5.40 (1.11)	5.24 (1.28)	5.53 (1.03)
	女性	5.49 (1.09)	5.57 (1.04)	5.32 (1.00)	5.27 (1.14)	5.45 (1.13)
	全体	5.40 (1.18)	5.39 (1.26)	5.35 (1.04)	5.26 (1.21)	5.49 (1.07)

()内は標準偏差。異なるアルファベットを付した年齢層間には5%水準の有意差がある。

各年齢段階毎に長寿観の相違を検討した処、「長寿」志向と「天命」志向の差異は青年後期以降の年齢段階では有意或いは有意傾向であるのに対し（青年後期： $t(139)=2.46$ $p<.05$ 、若年

成人： $t(90)=1.83$ $p<.08$ 、中年成人： $t(352)=1.85$ $p<.07$ 、老人： $t(151)=5.18$ $p<.0001$ 、青年中期では両者の差は有意でない ($t(234)=1.25$)。亦、「長寿」志向では年齢段階の主効果が有意であり ($F(4,966)=3.07$ $p<.05$)、多重比較 (HSD検定) の結果に依れば、青年中期と青年後期・老人との間に有意差がある。「天命」志向では年齢段階の差は有意ではない ($F(4,966)=1.28$)。

以上を纏めれば、青年後期以降、「天命」志向が「長寿」志向を上回るが、長寿志向は老人期に急減少し、「天命」志向が「長寿」志向を凌ぐ傾向は老人期に最も高まると言える。

相互独立性—協調性の年齢変化

相互独立性 (4項目) と相互協調性 (6項目) に就いての尺度項目への評定の平均を夫々の尺度値とした。全年齢層を一括した α 係数は、相互独立性=.71、相互協調性=.70であった。相互独立性と相互協調性の年齢層・性別毎の平均値を示したのが表9である。年齢段階 (対象者間要因) ×相互独立性—協調性 (対象者内要因) の分散分析に依れば、年齢段階×相互独立性—協調性の交互作用が有意で ($F(4,966)=38.28$ $p<.0001$)、年齢段階に依る平均値の差異は、相互独立性と相互協調性では全く異なっている。

表9 相互独立性・相互協調性の平均値

		青年中期	青年後期	若年成人期	中年成人期	老人期
相互独立性	男性	4.00 (1.02)	4.13 (1.11)	4.39 (1.02)	4.42 (0.87)	4.83 (0.96)
	女性	3.84 (1.13)	3.76 (1.04)	4.09 (1.00)	4.11 (0.93)	4.74 (0.90)
	全体	3.95a (1.05)	3.94ab (1.08)	4.20bc (1.01)	4.27c (0.91)	4.79d (0.93)
相互協調性	男性	4.89 (0.86)	4.90 (0.98)	4.40 (0.59)	4.28 (0.82)	4.14 (0.80)
	女性	5.16 (0.90)	5.12 (0.81)	4.74 (0.83)	4.50 (0.63)	4.26 (0.93)
	全体	4.97a (0.88)	5.02a (0.90)	4.62b (0.76)	4.39c (0.74)	4.19d (0.86)

()内は標準偏差。異なるアルファベットを付した年齢層間には5%水準の有意差がある。

即ち、相互独立性に就いては、年齢段階の主効果が有意で ($F(4,966)=20.33$ $p<.0001$)、年齢と共に上昇する傾向が見られるが、多重比較に依れば老人は他の如何なる年齢段階より、中年成人は青年 (中期・後期) よりも、若年成人は青年中期よりも、夫々相互独立性が高い。相互協調性に就いても年齢の主効果は有意であるが ($F(4,966)=36.14$ $p<.0001$)、相互独立性とは逆に加齢と共に低下する傾向がある。多重比較に依れば、老人、中年成人、若年成人に就いては、夫々其れより下の全ての年齢段階との間に有意な差があるが、青年後期と青年中期との間には有意差は無い。

各年齢段階毎に、相互独立性と相互協調性の差を検討すると、青年中期 ($t(234)=9.82$ $p<.0001$)、青年後期 ($t(139)=7.35$ $p<.0001$)、若年成人 ($t(90)=2.68$ $p<.01$) では、何方も相互協調性が相互独立性を凌いでいるが、中年成人 ($t(352)=1.67$) では有意な差は無く、老人 ($t(151)=5.55$ $p<.0001$) では逆に相互独立性が相互協調性を有意に上回っている。

肯定的自己認識に係わる年齢変化

1. 自己評価：2項目の平均を自己評価評定値とした。其の年齢層毎の平均値を表10の該当部分に示す。1要因分散分析に依れば、平均値間の差は有意で ($F(1,966)=29.77$ $p<.0001$) で、年齢と共に上昇する傾向が認められる。多重比較の結果に依れば、青年(中期、後期)と成人以降(若年成人、中年成人、老人)との間に有意差がある。即ち、成人、老人は青年より自己評価が高いと言える。

表10 肯定的自己認識に関する指標の平均値

		青年中期	青年後期	若年成人期	中年成人期	老人期
自己評価	男性	4.09 (1.27)	4.18 (1.05)	4.91 (0.99)	4.91 (0.95)	4.93 (0.88)
	女性	4.23 (1.23)	4.27 (1.17)	4.67 (1.12)	4.97 (1.04)	5.03 (1.00)
	全体	4.12a (1.26)	4.21a (1.12)	4.76b (1.07)	4.94b (0.99)	4.97b (0.93)
老人イメージ差異値						
知 恵	男性	0.67 (1.02)	0.95 (1.22)	-0.36 (1.31)	-0.03 (0.89)	-0.42 (0.89)
	女性	0.97 (0.97)	0.79 (1.12)	0.31 (0.87)	0.20 (1.00)	-0.34 (0.82)
	全体	0.75a (1.01)	0.87a (1.17)	0.06b (1.10)	0.08b (0.95)	-0.38c (0.86)
活 力	男性	-0.60 (1.29)	-0.43 (1.56)	-1.39 (1.17)	-0.53 (1.04)	-0.60 (0.93)
	女性	-0.74 (1.13)	-1.07 (1.27)	-0.82 (1.09)	-0.82 (1.03)	-0.66 (1.05)
	全体	-0.63a (1.25)	-0.77ab (1.46)	-1.03b (1.15)	-0.67a (1.05)	-0.63a (0.98)
厄 介	男性	0.05 (1.06)	-0.10 (0.94)	-0.31 (1.26)	0.03 (1.00)	0.12 (0.78)
	女性	-0.12 (1.02)	-0.29 (1.13)	-0.26 (0.95)	0.14 (0.95)	0.06 (0.77)
	全体	-0.01a (1.05)	-0.22b (1.06)	-0.28b (1.07)	0.08a (0.98)	0.09a (0.77)

()内は標準偏差。異なるアルファベットを付した年齢層間には5%水準の有意差がある。

2. 老人と成る年齢の自他比較：自分が「老人」と成るのは何歳頃と予測するかに就いての回答の各年齢段階毎の平均値は、表2に示した如くである。既に述べた「老人」と成る年齢の一般的評価を併せ検討するべく、年齢段階（対象者間要因）×一般・自分（対象者内要因）の分散分析を実施した処、年齢段階の主効果が有意で（ $F(4,959)=72.66$ $p<.0001$ ）で、年齢が高く成るに従って一般に老人と思う年齢も、自分が老人に成ると思う年齢も上昇している。亦、年齢段階×一般・自分の交互作用が有意で（ $F(4,959)=9.06$ $p<.001$ ）であり、一般と自分との関係は年齢段階により異なっている。即ち、青年中期（ $t(299)=2.65$ $p<.01$ ）は自分の方が一般的な他者より早期に老人に成ると見做しているのに対し、中年成人（ $t(352)=5.37$ $p<.0001$ ）と老人（ $t(150)=5.19$ $p<.0001$ ）は、自分は他者より老人と成るのは遅い、と考えている。尚、青年後期（ $t(138)=0.08$ ）と若年成人（ $t(90)=0.41$ ）では両者間に有意差は無い。即ち、他者と比較して自分の方が「老人・高齢者」になり難いと認める傾向は、中年成人・老人に顕著な特性であると言える。

3. 老人イメージの自他比較：老人イメージに関する22の形容詞対と同一の形容詞を用いて、自分自身のイメージを評定せしめた結果に就いて、其れを3つの老人イメージ因子、即ち、「知恵」「活力」「厄介」に含まれる形容詞毎に平均値を求めた。各々のイメージに就いて、自分自身に対する評定値と老人のイメージの評定値の差を差異値とし、其の年齢段階毎の平均値を算出した結果を表10の該当欄に示す。此の場合、正の数値は一般的な老人に対して、負の数値は自分に対して、夫々其のイメージを強く感じている事を示す。

「知恵」に関しては、老人のみが差異値が負、即ち一般的老人より自分自身に対して此のイメージを持っているのに対し（両者の差は $t(151)=5.47$ $p<.0001$ ）、若年成人（ $t(90)=0.53$ ）と中年成人（ $t(351)=1.65$ ）は0に近く、青年中期（ $t(231)=11.37$ $p<.0001$ ）と青年後期（ $t(139)=8.83$ $p<.0001$ ）の差異値は正、即ち、自分に其のイメージは少ないと評価している。差異値の平均間には有意差があり（ $F(4,962)=46.34$ $p<.00001$ ）、多重比較に依れば、老人は他の全ての年齢層との間に、成人（中年成人・若年成人）は青年（中期・後期）との間に、夫々有意差がある。

「活力」に関しては、全ての年齢層で差異値が負であり、一般的老人より自分自身に対して此のイメージを持っているが、差異値の平均間には有意差があり（ $F(4,962)=3.28$ $p<.05$ ）、多重比較に依れば、若年成人と青年中期・中年成人・老人との間に有意差がある。即ち、若年成人は自分に対し此のイメージを持つ傾向が最も著しく、之に対し大学生以外の年齢層では其の傾向が少ないと言えるが、両者の差は全ての年齢層で有意である（青年中期： $t(231)=7.65$ $p<.0001$ 、青年後期： $t(139)=6.24$ $p<.0001$ 、若年成人： $t(90)=8.59$ $p<.0001$ 、中年成人： $t(351)=12.05$ $p<.0001$ 、老人： $t(151)=7.88$ $p<.0001$ ）。

「厄介」に関しては、青年中期、中年成人、老人では差異値が0に近いのに対し（青年中期： $t(231)=0.08$ 、中年成人： $t(351)=1.57$ 、老人： $t(151)=1.48$ ）、青年後期と若年成人では差異値は負、即ち一般的老人より自分自身に対して此のイメージを持って居り（青年後期： $t(139)=2.45$ $p<.05$ 、若年成人： $t(90)=2.51$ $p<.05$ ）、差異値の平均間には有意差がある（ $F(4,962)=4.45$ $p<.01$ ）。多重比較に依れば、青年中期・中年成人・老人と青年後期・若年成人との間に有意差が

ある。

以上を纏めれば、概して老人は、一般的老人と自分自身を比較した場合、肯定的イメージは自分自身、否定的イメージは一般的老人に当て嵌るとする傾向が顕著であると言える。

4. 継時的比較：過去と将来の人生に於いて、良い出来事と悪い出来事の何方が多いかの評価に就いて、各年齢段階毎の平均値を示したのが表11である。年齢段階（対象者間要因）×過去・将来（対象者内要因）の分散分析に依れば、過去・将来の主効果が有意で（ $F(1,961)=65.99$ $p<.0001$ ）で、何方の年齢層でも「過去」の評定値が「将来」の其れより低い。亦、年齢段階の主効果も有意で（ $F(4,961)=13.15$ $p<.0001$ ）、青年（中期、後期）よりも成人以降（若年成人、中年成人、老人）で評価は高い。併し、年齢段階×過去・将来の交互作用も有意で（ $F(4,961)=17.81$ $p<.0001$ ）、若年成人（ $t(90)=1.12$ ）のみは「過去」と「未来」の間に有意差は無い。其れ以外の年齢段階では有意に「過去」が「現在」より低い（青年中期： $t(233)=6.95$ $p<.0001$ 、青年後期： $t(138)=4.51$ $p<.0001$ 、中年成人： $t(351)=3.54$ $p<.0001$ 、老人： $t(149)=2.80$ $p<.01$ ）。総じて青年層では、成人・老人層に比べて過去・将来を問わず、よい事が少ないと評価していると言える。

表11 継時比較に関する指標の平均値

		青年中期	青年後期	若年成人期	中年成人期	老人期
過去	男性	0.10 (2.54)	0.22 (2.69)	2.21 (2.00)	1.33 (2.04)	1.21 (2.29)
	女性	0.22 (2.74)	0.20 (2.44)	1.46 (1.93)	1.75 (2.21)	1.33 (1.95)
	全体	0.12a (2.59)	0.21a (2.55)	1.74b (1.98)	1.54b (2.14)	1.26b (2.13)
将来	男性	1.12 (2.68)	0.70 (2.75)	2.32 (2.37)	1.61 (2.10)	1.53 (2.03)
	女性	1.81 (2.52)	1.18 (2.73)	1.70 (2.05)	2.03 (2.12)	1.79 (2.14)
	全体	1.31ab (2.65)	0.94a (2.73)	1.93c (2.18)	1.82bc (2.12)	1.64bc (2.08)

()内は標準偏差。異なるアルファベットを付した年齢層間には5%水準の有意差がある。

次に、之等の過去・将来に就いての評価が、現在の評価に対し相対的に如何なる位置にあるかを検討すべく、前述した自己評価を現在評価と見做し、過去・現在・将来の3種の指標に就いて全調査対象者内でのz値を算出し、其の各年齢層毎の平均値を算出した。此処に於ける過去、現在、将来各評価の相対的位置を見ると、中年成人と老人層では評価間に有意差があり（夫々 $F(2,702)=8.56$ $p<.0001$ 、 $F(2,298)=6.62$ $p<.01$ ）、現在評価が過去及び将来評価より高く、継時的比較を通じた自己高揚傾向が見られる。青年後期層、若年成人層では評価間に有意差は無い（夫々 $F(2,276)=0.72$ 、 $F(2,180)=2.93$ ）。他方、青年中期層では有意差が見られるが（ $F(2,466)$

=10.84 $p<.0001$)、将来評価が最も高く現在評価が最低である。

類型化による検討

此処迄に年齢変化を検討して来た諸変数の内、高齢者・長寿に対する態度と自己認識に関する、(1) 老人のイメージ、(2) 老人に対する態度、(3) 長寿に対する態度、(4) 相互独立-相互協調性、(5) 自己評価、の5種を取り上げ、其れ等の相互関係に基づいて調査対象者を類型化して捉える事を此処では試みる。具体的には、老人イメージの3因子、老人に対する態度の3因子、長寿に対する態度の2因子、及び、相互独立性、相互協調性、自己評価の合計11変数を類別変数とし、ケースのクラスタ分析(Ward法)を年齢層毎に行なった。其の結果、青年中期、青年後期、若年成人の各層では4クラスタ、中年成人層と老人層では3クラスタが析出された。各年齢層・クラスタ別に各変数の平均値を示したのが表12~16であるが、各年齢層の傾向大要は以下の如くである。

1. 青年中期層：相互独立性に関し4クラスタ間に有意差があり ($F(3,231)=7.01$ $p<.001$)、多重比較ではクラスタ1は他のクラスタより相互独立性が有意に低い。一方、相互協調性に就いてもクラスタ間に有意差がある ($F(3,231)=2.86$ $p<.05$)。多重比較でクラスタ1とクラスタ3・4との間に有意差があり、前者は後者より相互協調性が有意に高い。全てのクラスタで相互協調性が相互独立性を凌いでいるが(クラスタ1： $t(33)=8.49$ $p<.0001$ 、クラスタ2： $t(69)=5.34$ $p<.0001$ 、クラスタ3： $t(85)=4.09$ $p<.0001$ 、クラスタ4： $t(44)=4.40$ $p<.0001$)、青年中期全体の平均値と比べた場合、相互独立性に就いてはクラスタ1は有意に低く ($t(33)=4.35$ $p<.0001$)、クラスタ3は高い傾向がある ($t(85)=1.88$ $p<.07$)。クラスタ2 ($t(69)=0.06$)、クラスタ4 ($t(44)=1.00$) では全体平均との間に有意差は無い。相互協調性に就いては、クラスタ1は有意に高く ($t(33)=2.10$ $p<.05$)、クラスタ4は低い傾向がある ($t(44)=1.82$ $p<.08$)。クラスタ2 ($t(69)=1.01$) とクラスタ3 ($t(85)=1.09$) では有意差は無い。之等の結果から、全体に相互協調性が相互独立性より高いものの、両者の相互関係に着目すれば、クラスタ1は極端な相互協調性優勢型、クラスタ2は相互協調性優勢型と言える。他方、クラスタ3は相互独立性が相対的に高い事、クラスタ4は相互協調性が相対的に低い事に着目すれば、両者は何方かと言えば青年中期層に於ける相互独立性優勢型であると解釈し得る。

其の他の変数に於いても、全て4クラスタ間に有意差がある(自己評価： $F(3,231)=19.82$ $p<.00001$ 、老人イメージ「知恵」： $F(3,231)=23.74$ $p<.00001$ 、「活力」： $F(3,231)=12.78$ $p<.00001$ 、「厄介」： $F(3,231)=15.15$ $p<.00001$ 、老人に対する態度「引退」： $F(3,231)=49.36$ $p<.00001$ 、「受容」： $F(3,231)=24.38$ $p<.00001$ 、「迷惑」： $F(3,231)=49.51$ $p<.00001$ 、長寿への態度「長寿」： $F(3,231)=20.33$ $p<.00001$ 、「天命」： $F(3,231)=42.28$ $p<.00001$)。之等の結果を纏めるに、相互協調性優勢型のクラスタ1は、自己評価が極端に低く、老人に対しては否定的なイメージや態度を持っている一方、何方かと言えば「長寿」より「天命」を志向している。相互協調性優勢型であるクラスタ2は、自己評価が最も高く、老人に対する肯定的なイメージや態度を持ち、「長寿」志向が目立つ。相対的な相互独立性優勢型と言えるクラスタ3は、自己評価は稍高く、老人に対して肯定・否定半ばするイメージや態度を持ち、「天命」志向が顕著であ

る。同じく相対的な相互独立性優勢型と見做し得るクラスタ4は、自己評価は高くはなく、老人に対して肯定的なイメージや態度を持ち、何方かと言えば「天命」より「長寿」を志向していると言える。

表12 青年中期層のクラスタ

	相互 独立性	相互 協調性	自己 評価	知恵	活力	厄介	引退	受容	迷惑	長寿 志向	天命 志向
クラスタ1(n=34)	3.23a (0.73)	5.26ac (0.96)	2.91a (0.80)	4.00a (0.98)	3.55a (0.50)	4.27a (0.68)	3.93a (0.73)	4.51a (0.68)	4.29a (0.81)	4.81a (1.33)	5.59a (1.22)
クラスタ2(n=70)	3.96b (1.17)	5.08cd (0.92)	4.65c (1.06)	5.05c (0.75)	4.45b (0.88)	3.74b (0.75)	2.34b (0.71)	5.70d (0.72)	2.37b (0.95)	6.06a (0.63)	4.84b (1.07)
クラスタ3(n=45)	4.15b (0.99)	4.86bd (0.91)	4.31c (1.26)	4.47b (0.74)	3.64a (0.89)	4.22a (0.95)	2.90c (0.80)	5.27c (0.82)	3.60c (1.01)	4.80b (1.31)	6.23c (0.68)
クラスタ4(n=86)	4.07b (0.82)	4.77b (0.74)	3.86b (1.06)	4.25ab (0.66)	3.98a (1.32)	3.20c (0.91)	2.32b (0.66)	4.96b (0.71)	2.44b (1.17)	5.18a (0.86)	4.54b (1.01)

()内は標準偏差。異なるアルファベットを付したクラスタ間には5%水準の有意差がある。

2. 青年後期層：相互独立性に関し4クラスタ間に有意差がある ($F(3,136)=9.51$ $p<.00001$)。多重比較ではクラスタ1は他のクラスタ、クラスタ2とクラスタ4との間に有意差があり、クラスタ1が最も低く、クラスタ2が其れに次ぐ。相互協調性に就いてもクラスタ間に有意差がある ($F(3,136)=7.14$ $p<.001$)。多重比較でクラスタ1とクラスタ3・4、クラスタ2とクラスタ4との間に有意差があり、クラスタ1・2は高くクラスタ3・4は低い。全てのクラスタで相互協調性が相互独立性より高い有意差或いは有意傾向があるが(クラスタ1： $t(13)=4.74$ $p<.0001$ 、クラスタ2： $t(46)=7.46$ $p<.0001$ 、クラスタ3： $t(15)=1.89$ $p<.08$ 、クラスタ4： $t(59)=2.23$ $p<.05$)、大学生全体の平均値と比べた場合、相互独立性に就いてはクラスタ1は有意に低く ($t(13)=3.19$ $p<.001$)、クラスタ4は高い ($t(59)=2.98$ $p<.01$)。クラスタ2 ($t(46)=1.35$)、クラスタ3 ($t(18)=0.27$) では全体平均と間に有意差は無い。相互協調性に就いては、クラスタ1 ($t(13)=2.47$ $p<.05$)、クラスタ2 ($t(46)=2.37$ $p<.05$) は有意に高く、クラスタ4は低い ($t(59)=3.44$ $p<.001$)。クラスタ3では有意差は無い ($t(18)=0.39$)。之等の結果から、全体に相互協調性が相互独立性より高いものの、両者の相互関係に着目すれば、クラスタ1・2は相互協調性優勢型、クラスタ3・4は相対的な相互独立性優勢型と言える。

其の他の変数に関しても、全て4クラスタ間に有意差が認められた(自己評価： $F(3,136)=6.13$ $p<.001$ 、老人イメージ「知恵」： $F(3,136)=24.79$ $p<.00001$ 、「活力」： $F(3,136)=10.83$ $p<.00001$ 、「厄介」： $F(3,136)=4.97$ $p<.01$ 、老人に対する態度「引退」： $F(3,136)=19.78$ $p<.00001$ 、「受容」： $F(3,136)=11.77$ $p<.00001$ 、「迷惑」： $F(3,136)=19.04$ $p<.00001$ 、長寿に対する態度「長寿」： $F(3,136)=15.32$ $p<.00001$ 、「天命」： $F(3,136)=13.88$ $p<.00001$)。此の結果を要すれば、相互協調性優勢型のクラスタ1は、自己評価が低く、老人に対する否定的なイ

メージや態度を持っている一方、「天命」志向が目立つ。同じく相互協調性優勢型と言えるクラスタ2は、自己評価が高く、老人に対しては比較的肯定的なイメージや態度を持ち、死生観は「長寿」と「天命」志向の双方が高い。青年期としては相互独立性の優勢なクラスタ3は、自己評価は必ずしも低くなく、老人に対して比較的肯定的なイメージや態度を持ち、何方かと言えば「天命」より「長寿」を志向していると言える。同じく青年期としては相互独立性の優勢なクラスタ4は、自己評価は高く、老人に対する肯定的なイメージや態度を持ち、「天命」志向が顕著である。

表13 青年後期層のクラスタ

	相互 独立性	相互 協調性	自己 評価	知恵	活力	厄介	引退	受容	迷惑	長寿 志向	天命 志向
クラスタ1(n=14)	2.79a (1.35)	5.63a (0.92)	3.18a (1.22)	3.66a (0.87)	3.17a (1.02)	4.41ac (1.04)	3.57a (0.68)	4.55a (0.61)	4.14a (1.17)	3.93a (1.15)	6.18a (0.85)
クラスタ2(n=47)	3.78bd (0.83)	5.29ac (0.79)	4.49b (1.06)	4.45b (0.74)	3.62a (0.93)	3.98cd (0.75)	2.61c (0.86)	5.43b (0.79)	2.94c (0.89)	5.69c (0.86)	5.82a (0.91)
クラスタ3(n=19)	4.01cd (1.17)	4.91bc (1.19)	3.95b (0.97)	5.57c (0.73)	4.62b (0.86)	3.50b (0.91)	1.75d (0.62)	6.11c (0.83)	1.95d (1.11)	3.97a (1.80)	6.37a (1.00)
クラスタ4(n=60)	4.31c (0.96)	4.70b (0.73)	4.33b (1.05)	4.61b (0.47)	3.97c (0.61)	3.75bd (0.57)	2.91b (0.63)	5.19b (0.64)	3.51b (0.99)	4.97b (1.04)	4.57b (1.16)

()内は標準偏差。異なるアルファベットを付したクラスタ間には5%水準の有意差がある。

3. 若年成人層：相互独立性に関し4クラスタ間に有意差がある ($F(3,87)=7.87$ $p<.0001$)。多重比較ではクラスタ1と他のクラスタ間に有意差があり、クラスタ1は他より低い。相互協調性に就いてもクラスタ間に有意差がある ($F(3,87)=7.64$ $p<.0001$)。多重比較でクラスタ1と他のクラスタ間に有意差があり、クラスタ1は他より高い。クラスタ1・2では相互協調性が相互独立性より有意に高く (クラスタ1: $t(18)=4.99$ $p<.0001$ 、クラスタ2: $t(29)=2.51$ $p<.05$)、クラスタ4は相互独立性が相互協調性を凌ぐ有意傾向がある ($t(12)=1.71$ $p<.10$)。若年成人全体の平均値と比べた場合、相互独立性に就いてはクラスタ1は有意に低く ($t(18)=3.59$ $p<.01$)、クラスタ4は高い ($t(12)=2.78$ $p<.01$)。クラスタ2 ($t(29)=0.28$)、クラスタ3 ($t(28)=1.19$) では全体平均と間に有意差は無い。相互協調性に就いては、クラスタ1 ($t(18)=2.96$ $p<.01$) は有意に高く、クラスタ4は低い ($t(12)=2.66$ $p<.05$)。クラスタ2 ($t(29)=0.54$)、クラスタ3 ($t(28)=1.67$) では有意差は無い。之等の結果から、相互協調性と相互独立性の相互関係に着目すれば、クラスタ1・2は相互協調性優勢型、クラスタ3は独立性・協調性拮抗型、クラスタ4は相互独立性優勢型と言える。

他の変数に関しては、其の全てに於いて4クラスタ間に有意差がある (自己評価 $F(3,87)=19.14$ $p<.0001$ 、老人イメージ「知恵」: $F(3,87)=14.37$ $p<.00001$ 、「活力」: $F(3,87)=8.19$ $p<.0001$ 、「厄介」: $F(3,87)=6.45$ $p<.001$ 、老人に対する態度「引退」: $F(3,87)=9.23$

$p<.00001$ 、「受容」： $F(3,87)=10.47$ $p<.00001$ 、「迷惑」： $F(3,87)=9.77$ $p<.00001$ 、長寿に対する態度「長寿」： $F(3,87)=13.31$ $p<.00001$ 、「天命」： $F(3,87)=12.25$ $p<.00001$ 。之等の結果を要するに、相互協調性優勢型のクラスタ1は、自己評価が高く、老人に対する肯定的なイメージや態度を持っている一方、「長寿」志向ではあるが「天命」志向も低くはない。同じく相互協調性優勢型と言えるクラスタ2は、自己評価が最も低く、老人に対する否定的なイメージや態度を持ち、「長寿」より「天命」志向が高い。独立性・協調性拮抗型であるクラスタ3は、自己評価は最も高く、老人に対する肯定的なイメージや態度を持ち、「天命」志向より「長寿」志向と言える。相互独立性優勢型のクラスタ4は、自己評価は必ずしも低くはなく、老人に対する肯定的なイメージや態度を持ち、「長寿」より「天命」を志向していると言える。

表14 若年成人期層のクラスタ

	相互 独立性	相互 協調性	自己 評価	知恵	活力	厄介	引退	受容	迷惑	長寿 志向	天命 志向
クラスタ1(n=19)	3.38a (0.99)	5.20a (0.86)	4.92a (0.71)	4.07b (0.60)	4.04b (0.67)	4.10a (0.78)	2.88a (0.89)	5.12b (0.56)	3.37a (0.83)	6.04c (0.70)	5.47b (1.03)
クラスタ2(n=30)	4.16b (0.83)	4.68b (0.59)	3.93b (1.08)	3.69a (0.74)	3.42a (0.84)	4.63b (0.78)	3.49b (0.61)	4.50a (0.86)	4.23b (0.58)	4.63a (0.75)	5.38b (0.91)
クラスタ3(n=29)	4.61b (0.80)	4.35b (0.55)	5.59c (0.71)	4.49c (0.52)	4.39b (0.76)	4.09a (0.56)	2.78b (0.69)	5.00b (0.73)	3.34a (0.97)	5.13b (0.89)	4.72a (0.88)
クラスタ4(n=13)	4.60b (1.20)	4.21b (0.90)	4.58a (0.67)	4.98d (0.77)	4.32b (0.98)	3.67a (0.74)	2.40b (0.60)	5.90c (0.84)	2.85a (1.20)	4.35a (1.28)	6.50c (0.54)

()内は標準偏差。異なるアルファベットを付したクラスタ間には5%水準の有意差がある。

4. 中年成人層：相互独立性に関し3クラスタ間に有意差がある ($F(2,350)=17.97$ $p<.00001$)。多重比較ではクラスタ1と他のクラスタ間に有意差があり、クラスタ1は他より相互独立性が低い。相互協調性に就いてもクラスタ間に有意差がある ($F(2,350)=14.98$ $p<.00001$)。多重比較でクラスタ1と他のクラスタ間に有意差があり、クラスタ1は他より相互協調性が高い。クラスタ1では相互協調性が相互独立性より有意に高く ($t(126)=7.15$ $p<.0001$)、クラスタ3は相互独立性が有意に相互協調性を凌いでいる ($t(112)=2.89$ $p<.01$)。クラスタ2は両者間に有意差は無い ($t(112)=0.64$)。中年成人全体の平均値と比べた場合、相互独立性に就いてはクラスタ1は有意に低く ($t(126)=4.51$ $p<.0001$)、クラスタ3は高い ($t(112)=3.30$ $p<.001$)。クラスタ2では全体平均と間に有意差は無い ($t(112)=1.67$)。相互協調性に就いては、クラスタ1 ($t(126)=5.00$ $p<.0001$) は有意に高く、クラスタ3は低い ($t(112)=3.07$ $p<.01$)。クラスタ2では有意差は無い ($t(112)=0.91$)。之等の結果から、クラスタ1は相互協調性優勢型、クラスタ2は独立性・協調性拮抗型、クラスタ3は相互独立性優勢型と言える。

他の変数でも3クラスタ間に有意差がある (自己評価： $F(2,350)=78.14$ $p<.00001$ 、老人イメージ「知恵」： $F(2,350)=46.81$ $p<.00001$ 、「活力」： $F(2,350)=31.38$ $p<.00001$ 、「厄介」： F

(2,350)=19.36 $p<.00001$ 、老人に対する態度「引退」： $F(2,350)=41.39$ $p<.00001$ 、「受容」： $F(2,350)=20.91$ $p<.00001$ 、迷惑： $F(2,350)=43.57$ $p<.00001$ 、長寿観「長寿」： $F(2,350)=30.31$ $p<.00001$ 、「天命」： $F(2,350)=34.97$ $p<.00001$ 。以上の結果を纏めれば、相互協調性優勢型のクラスタ1は、自己評価が低く、老人に対する否定的なイメージや態度を持ち、何方かと言えば「長寿」より「天命」志向が高い。独立性・協調性拮抗型であるクラスタ2は、自己評価は比較的高く、老人に対する極めて肯定的なイメージや態度を持ち、「天命」志向より「長寿」志向と言える。相互独立性優勢型のクラスタ3は、自己評価は最も高く、老人に対するイメージや態度は肯定・否定半ばし、「長寿」より「天命」を志向していると言える。

表15 中年成人期層のクラスタ

	相互 独立性	相互 協調性	自己 評価	知恵	活力	厄介	引退	受容	迷惑	長寿 志向	天命 志向
クラスタ1(n=127)	3.91a (0.90)	4.65a (0.59)	4.24a (0.87)	3.98a (0.66)	3.72a (0.80)	4.37b (0.79)	3.44c (0.75)	4.90a (0.92)	3.91c (0.73)	4.89a (1.01)	5.07b (0.89)
クラスタ2(n=113)	4.40b (0.80)	4.33b (0.75)	5.12b (0.85)	4.80c (0.64)	4.58c (0.85)	3.85a (0.71)	2.59a (0.70)	5.49b (0.80)	2.91a (0.99)	5.63b (0.81)	4.77a (1.45)
クラスタ3(n=113)	4.55b (0.91)	4.16b (0.80)	5.55c (0.76)	4.34b (0.65)	4.24b (0.91)	4.37b (0.68)	3.02b (0.72)	4.88a (0.71)	3.52b (0.77)	4.76a (0.88)	5.95c (0.91)

()内は標準偏差。異なるアルファベットを付したクラスタ間には5%水準の有意差がある。

5. 老人層：相互独立性に関し3クラスタ間に有意差がある ($F(2,149)=33.39$ $p<.00001$)。多重比較ではクラスタ1とクラスタ2・3、クラスタ2とクラスタ3の間に有意差があり、クラスタ1、2、3の順に相互独立性が低い。他方、相互協調性に就いてはクラスタ間に有意差は無い ($F(2,149)=0.78$)。全てのクラスタで相互独立性が相互協調性より高いが、両者の差はクラスタ2 ($t(78)=3.71$ $p<.0001$)とクラスタ3 ($t(31)=6.60$ $p<.0001$)では有意であるのに対し、クラスタ1では有意差は無い ($t(40)=0.75$)。老人全体の平均値と比べた場合、相互独立性に就いてはクラスタ1は有意に低く ($t(40)=3.08$ $p<.01$)、クラスタ3は高い ($t(31)=7.58$ $p<.0001$)。クラスタ2 ($t(78)=1.96$)では全体平均と間に有意差は無い。相互協調性では、全てのクラスタで全体平均との有意差は無い (クラスタ1： $t(40)=0.25$ 、クラスタ2： $t(78)=0.94$ 、クラスタ3： $t(31)=0.77$)。老人層では一般に相互独立性が最も高い事を考慮すると、クラスタ1は老人層としては相互独立性が弱く相対的に相互協調性が優勢な型、クラスタ2は独立性・協調性拮抗型、クラスタ3は極端な相互独立性優勢型と解釈する事が出来るであろう。

他の変数でも3クラスタ間に有意差が認められた (自己評価： $F(2,149)=29.99$ $p<.00001$ 、老人イメージ「知恵」： $F(2,149)=20.31$ $p<.00001$ 、「活力」： $F(2,149)=25.75$ $p<.00001$ ³⁾、老人に対する態度「引退」： $F(2,149)=24.90$ $p<.00001$ 、「受容」： $F(2,149)=25.07$ $p<.00001$ 、「迷惑」： $F(2,149)=8.09$ $p<.001$ 、長寿に対する態度「長寿」： $F(2,149)=14.89$ $p<.00001$ 、「天命」： $F(2,149)=28.47$ $p<.00001$)。此の結果を纏めると、相互協調性優勢型のクラスタ1は、

自己評価が低く、老人に対する否定的なイメージや態度を持ち、「長寿」志向も「天命」志向も他より弱い。独立性・協調性拮抗型であるクラスタ2は、自己評価は比較的高く、老人に対する極めて肯定的なイメージや態度を持ち、相対的に「天命」志向は弱く「長寿」志向は強いと言える。相互独立性優勢型のクラスタ3は、自己評価は最も高く、老人に対するイメージや態度は何方かと言えば肯定的で、「長寿」思考と「天命」志向の何方もが他より強い。

表16 老人期層のクラスタ

	相互 独立性	相互 協調性	自己 評価	知恵	活力	厄介	引退	受容	迷惑	長寿 志向	天命 志向
クラスタ1(n=32)	4.33a (0.96)	4.15 (0.95)	4.40a (0.79)	3.69a (0.79)	3.47a (0.89)	4.18 (0.60)	3.91b (0.54)	4.58a (0.82)	4.17b (0.59)	4.35a (1.03)	5.12a (1.07)
クラスタ2(n=79)	4.64b (0.69)	4.27 (0.73)	4.92b (0.78)	4.48b (0.60)	4.32b (0.71)	4.00 (0.65)	3.04a (0.58)	5.20b (0.56)	3.46a (0.85)	4.97b (0.73)	5.25a (0.93)
クラスタ3(n=41)	5.76c (0.72)	4.05 (1.03)	5.84c (0.84)	4.64b (0.93)	4.90c (1.13)	4.24 (0.97)	3.29a (0.90)	5.79c (0.96)	3.96b (1.51)	5.36c (0.68)	6.58b (0.63)

()内は標準偏差。異なるアルファベットを付したクラスタ間には5%水準の有意差がある。

考 察

自己認識の発達過程

青年中期から老人期に掛けての5つの年齢層を対象とした今回の横断的資料に於いては、平均値に基づく一般的傾向に関して、大要以下の如き発達の傾向が認められた。即ち、

1. 加齢、老人に対する認知に関して、総じて青年期には肯定的な態度が見られるが、成人期に稍否定的方向に転じ、老人期では否定的方向が強まる側面（「知恵」「引退」「迷惑」と、逆に肯定的方向が復活する側面（「活力」と）に分化する。
2. 「長寿」「天命」と言う相反する2つの方向に対する明確な志向が現れるのは青年中期以降であって、「天命」志向が「長寿」志向を一貫して上回り、其の傾向は老人期に最も顕著になる。
3. 青年期には相互独立性が低く相互協調性が高いが、成人期以降一貫して相互独立性は上昇し、相互協調性は低下する。
4. 自己を肯定的に認識する傾向は成人期、殊に中年成人期以降に高まり、老人期に最も顕著となる。其れは、1) 自己評価の高さ、2) 他者と比較して自己を肯定的に評価する傾向、3) 継時的比較に依り現在の自己を肯定的に評価する傾向、の何方にも現れている。

斯くの如く、高齢化や長寿の認知に於いて、総じて老人層では一般に否定的見解が強まると共に「天命」志向が増える傾向が見られ、之等は加齢に伴う体力や気力の弱まりの反映とも言い得よう。併し其の一方、自己認識に関しては老人期に於ける肯定的認識や自己高揚傾向が極めて顕著であり、老人に対する態度で「活力」の評価が再上昇する傾向や、相互独立性が高い事も、其

の文脈に沿って解釈可能である。何方にせよ、之等諸指標が一貫した傾向を示している事から推して、成人期から老人期に掛けて一般に自己に対する肯定的認識が優勢になる傾向 (Jackson et al., 1990) が確認されたと同時に、肯定的自己認識を齎らす心理機制として、社会的比較や継時的比較が作用している可能性が示唆される。

他方、文化的自己観の内面化の程度に関しては、相互独立性に就いて従来の知見と一致する結果、即ち、青年層から老人層に掛けて一義的に其の程度が上昇する傾向が認められた。然るに、相互協調性に関しては青年期から中年成人期に掛けて低下した後、老人期に再び上昇するというのが従来の知見であったが、今回の資料では老人層に至るも尚低下し続けている。即ち、老人期には相互独立性と相互協調性の双方が高まると言うのが従来の知見であったが、本調査の対象と成った老人は、他の年齢層に比して相互独立性は最も高く、相互協調性は最も低いと言う特異な傾向を示している。

此の点に就いては、背景要因として以下の2点が考えられる。第1に、今回の対象者老人層の特性である。老人対象者の約7割は進学校の卒業生で、男女共全員大学卒業生である。成人サンプルの場合、高学歴者程相互独立性は高く、相互協調性は低い傾向が従来指摘されて居り (高田, 1999; 高田, 2000)、斯かる対象者の偏りが今回の特異な傾向を生んだ可能性は大きい。第2に、今回は短縮版の相互独立性-協調性尺度を用いた事が挙げられる。20項目から成る元尺度に比して、短縮版尺度に依る測定値では相互協調性が低く成る傾向がある事が知られている (高田, 2000)。此の為、老人の相互協調性測定値が相対的に低下した可能性があろう。併し乍ら、短縮版尺度を用いた場合でも、各年齢段階の測定値の相対的關係は変化しない事も確認されている故 (高田, 2000)、此の要因の影響はサンプルの偏りに比せば少ないと考えられる。何方にせよ、青年期までの発達段階に比して社会的階層に依る個人特性への影響が大きい成人層や老人層に関しては、今後は無作為抽出した資料を収集し更に一層の検討を行う事が必要であろう。

之に対し高校生・大学生の青年期層では、高い相互協調性、低い相互独立性と自己評価と言う、従来屢次見られた傾向が再度確認された。更に亦、自己に対する斯かる認識を惹起する機制としての社会的比較や継時的比較が、成人や老人とは正反対の方向に作用していることも示唆される。殊に中年成人や老人層で見られた、自己高揚的な社会的比較や継時的比較が全く見られず、其れ等の比較は逆に自己卑下的なものである傾向が青年層で顕著な故である。之は、青年期では社会的比較が低い相互独立性と高い相互協調性を導き、其れが批判的自己認識を齎らすことを示した高田 (2002) の知見と軌を一にするものと言える。他方、青年層では老人に対する肯定的態度が相対的に強い一方、青年中期層では長寿に対する態度が必ずしも明確ではなかったが、之等の含意する処に就いては次節に於いて考察する。

相互独立-相互協調性の類型と老人観・長寿観

本研究で扱った5つの年齢層の各々で、(1) 老人のイメージ、(2) 老人に対する態度、(3) 長寿観、(4) 相互独立-相互協調性、(5) 自己評価、の5種の指標に基づいて得られたクラスタを纏めると表17の如くに成る。青年層と老人層では相対的なものであるとは言え、各年齢層を通じて相互協調性優勢型と相互独立性優勢型の2類型が認められ、若年成人層以降は、其れに加えて

独立性・協調性拮抗型も認められる事は、既に述べた如くである。而して、(1) 老人に対する態度・イメージと長寿観が之等の類型と密接な関連を持つ事、及び、(2) 其れ等の関連が発達的な含意を持つ事、の2点が結果の仔細な検討を通じて分明するように思われる。以下、之に就いて少しく論述する。

表17 各クラスタの特徴

	自己評価	老人への態度	長寿への態度	該当するクラスタ	典型的な時期
相互協調性優勢型 1	低	否定的	天命志向	青年中期クラスタ 1 青年後期クラスタ 1 若年成人期クラスタ 2 中年成人期クラスタ 1	青年期
	低	否定的	矛盾傾向	老人期クラスタ 1	
相互協調性優勢型 2	高	肯定的	矛盾傾向	青年中期クラスタ 2 青年後期クラスタ 2 若年成人期クラスタ 1	児童期?
相互独立性優勢型 1	高	中間的	天命志向	青年中期クラスタ 3 青年後期クラスタ 3	成人期
	高	稍肯定的	天命志向	若年成人期クラスタ 4 中年成人期クラスタ 3	
	高	肯定的	矛盾傾向	老人期クラスタ 3	
相互独立性優勢型 2	中	肯定的	長寿志向	青年中期クラスタ 4 青年後期クラスタ 4	?
独立性・協調性拮抗型	高	肯定的	長寿志向	若年成人期クラスタ 3 中年成人期クラスタ 2 老人期クラスタ 2	老人期

先ず、相互協調性優勢型に共通する特性として、(1) 自己評価が低い、(2) 老人に対する否定的なイメージ・態度を持つ、(3) 老人層を除いては天命志向である、の3点がある事は、青年中期層のクラスタ 1、青年後期層のクラスタ 1、若年成人層のクラスタ 2、中年成人層のクラスタ 1、老人層のクラスタ 1 に認められる。但し、老人層のみは、(3) 天命志向も長寿志向も弱いと言う矛盾した様態が示されている。これが相互協調性優勢型 1 である。

亦、相互協調性優勢型ではあるが、上述した処とは全く異なった特性を持つクラスタが、青年中期 (クラスタ 2)、青年後期 (クラスタ 2)、若年成人 (クラスタ 1) の各層では見出される。即ち、之等にあつては (1) 自己評価が高い、(2) 老人に対して肯定的なイメージ・態度を持つ、と言う上述とは全く逆の特性が認められるのである。尚、(3) 長寿観に関しては長寿志向と天命志向の双方とも高いと言う矛盾した傾向が示されている。相互協調性優勢型 2 がこれである。

他方、相互独立性優勢型に関しては、其れに随伴する特性が年齢層によって異なっている。青

年中期（クラスタ3）・後期層（クラスタ3）では、(1) 高い自己評価、(2) 老人に対する中間的なイメージ・態度、(3) 天命志向、が挙げられる。他方、若年成人層（クラスタ4）・中年成人層（クラスタ3）では、(1) 高い自己評価、(2) 老人に対する何方かと言えば肯定的なイメージ・態度、(3) 天命志向、が挙げられる。其れに対し老人期（クラスタ3）では、(1) 高い自己評価、(2) 老人に対する肯定的なイメージ・態度、の2点は成人期と同様であるものの、(3) 長寿観に関しては長寿志向と天命志向の双方とも強く、矛盾した傾向を示している。これらが相互独立性優勢型1である。

亦、青年中期・後期層では此処でも稍異なった特性を示すクラスタがある。即ち、クラスタ4（青年中期）とクラスタ4（青年後期）は、(1) 比較的高い自己評価、(2) 肯定的な老人イメージ・態度、(3) 長寿志向、と言う前述したタイプとは些か相違した特徴が現れているのであり、これが相互独立性優勢型2である。

最後に、若年成人層以降に見られる相互独立性・協調性拮抗型（若年成人層はクラスタ3、中年成人層・老人層ではクラスタ2）では、(1) 高い自己評価、(2) 老人に対する肯定的イメージ・態度、(3) 長寿志向、が共通して認められる。

発達の含意

以上に概観した諸クラスタの内、低自己評価を伴った相互協調性優勢型1（青年中期層：クラスタ1、青年後期層：クラスタ1、若年成人層：クラスタ2、中年成人層：クラスタ1、老人層：クラスタ1）は、青年期に典型的な類型である事が高田（2003）に依り示唆される。従って、此の類型に随伴する、老人に対する否定的なイメージ・態度を持つ事と天命志向は、青年期に特徴的な老人観と長寿観である事が示唆される。若年成人期以降も此の類型に属している個人は、人格的発達が謂わば青年期段階に停滞していると解釈出来よう。斯く考えれば、相互協調性優勢型の老人が長寿観に関して矛盾した態度を示しているのは、間近に迫った死に直面して天命志向に徹し切れずに浮遊している状態を反映していると理解する事も可能である。之は本稿冒頭で触れた小池（1993）の指摘とも合致する。

他方、青年中期層から若年成人層迄で見られた、高い自己評価を伴う相互協調性優勢型2は、従来の研究では見出されて居ない、今回初めて現れた類型である。併し、相互協調性が高い一方自己評価が高い事は、児童後期の特徴であり（高田，2001；2002）、相互協調性と自己評価の高さは、大人が良しとする価値の受動的な受け入れの結果であるとも理解される（高田，2002）。従って、青年中期以降で此の類型に属する個人は、児童期の段階に停滞している者であり、此の類型の個人に見られる老人に対する肯定的態度も、社会一般での建前的価値の受動的の内面化の結果であるとの解釈も可能であろう。而して、斯く幼稚なる段階に止まる青年は未だ老化や死の真实性を了解出来ない事が、長寿観に関する矛盾した理解を齎している、と解釈する事も出来よう。

翻って、高い自己評価を伴う相互独立性優勢型1は（若年成人層：クラスタ4、中年成人層：クラスタ3）成人期に典型的な類型であって（高田，2003）、此の類型に随伴する老人に対する現実的且つ比較的肯定的な態度や天命志向は、其の意味で成人期に典型的な老人観・長寿観であ

ると言えよう。同時に、此の類型は青年中・後期層と老人層にも見られる。青年中・後期の場合（両者共クラスタ3）、老人への態度が中間的である以外は成人期と殆ど同様の傾向が示されて居り、其の意味で成人期的人格の発達を先取している群と言えるやも知れぬ。老人層の場合（クラスタ3）は、肯定的な老人への態度は若年・中年成人期と同様であるものの、長寿観は天命志向と長寿志向の双方とも高い矛盾した傾向が現れている。後述する如く長寿志向は老人期に特徴的な傾向である故、此の類型の老人は成人の特質を保持しつつ長寿観のみ老人に特有の傾向を示すに至ったタイプであると考えられる。

処で、青年前期と青年後期層（両者共クラスタ4）も相対的な相互独立性優勢型ではあるが、上述した成人期に典型的な類型とは異なった特徴を持っている事は前述した。即ち、相対的に高い相互独立性、中程度の自己評価、老人に対する比較的肯定的な態度、長寿志向と言う特徴を同時に持つ此の型が、発達的には奈辺に位置付けられるのか、現段階では分明ではない。一般的な青年とは異なり、日本文化に優勢な相互協調的自己観を必ずしも内面化せず、同時に必ずしも成人の価値規範を先取しているのでもない此の相互独立性優勢型2の青年の発達の含意の解明は、今後に残された問題の1つである。

最後に、若年成人層以降に見られた（若年成人層：クラスタ3、中年成人層：クラスタ2、老人層：クラスタ2）、高い自己評価を有する相互独立性・相互協調性拮抗形は、老人期に典型的な類型である（高田，2003）。従って、此の型に随伴する肯定的な老人への態度、長寿志向は、老人期に特徴的な傾向であると言える。斯くの如く仮定すると、若年成人層・中年成人層で此のタイプに属する個人は、老人期への発達を先取している群であると見做す事も出来よう。

以上の如き推論に基づくならば、老人に対する態度と長寿観に関して、先に見た単なる年齢層毎の平均値の比較に基づく結論とは些か異なった、下記の如き各発達段階に特徴的な傾向を指摘し得るであろう。即ち、(1) 老人に対する態度に関しては、児童期は肯定的、青年期は否定的、成人期は比較的肯定的、老人期は肯定的、である。(2) 長寿観に関しては、児童期は未形成、青年期と成人期は天命志向、老人期は長寿志向、である。而して、実際の歴年齢による年齢層と、之等の発達段階との間に乖離が見られる個人がある。即ち、(1) 児童期の発達段階に停滞していると解釈し得る者が歴年齢上の青年中期、青年後期、若年成人期に見られる、(2) 青年期の発達段階に停滞した者が歴年齢上の若年成人期、中年成人期、老人期に見られる、(3) 成人期の発達段階に停滞した者が老人期に見られる。一方、(1) 成人期の発達段階を先取した者が青年中期と青年後期に見られる、(2) 老人期の発達段階を先取した者が中年・若年成人期に存在する。更に興味深い事は、之等の歴年齢と人格の発達段階の乖離のある類型に於いては、(1) 老人に対する態度に就いては、何方の場合も人格の発達に応じた特徴を示しているのに対し、(2) 長寿観に就いては、歴年齢が増す程、長寿志向が高まる或いは天命志向が弱まる、即ち死を忌避する傾向が顕著となり、必ずしも人格の発達に即した特徴を示しては居ないのである。之等に就いて模式的に図示したのが図1である。

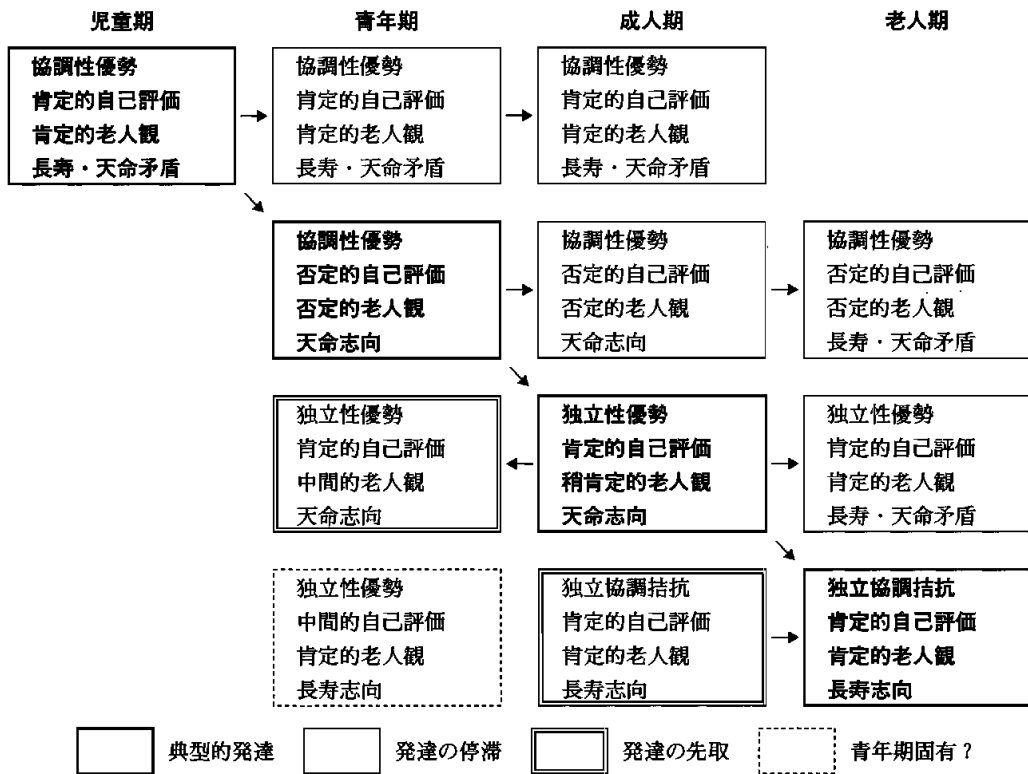


図1 発達経過の模式図

以上、今回の調査に依って、日本文化に於ける文化的自己観の内面化に伴う人格的発達と自己認識の様態に就いての従来の知見が補強されると共に、其れと現代日本社会に於ける加齢、長寿、生命や死の問題との関係に就いて、一定の示唆を得るを得た。併し乍ら、既に述べた調査対象者の偏りの問題は固より、今回の調査には尚多くの問題点も残ると共に、日本文化に於ける人格的発達と加齢との関係に就いての考察も、未だ粗笨なものである。更なる資料の集積と検討が要請される所以である。

注

- 1) 本研究の実施に際しては、平成12～14年度科学研究費（基盤C2：12610152、研究代表者：高田利武）の助成を受けた。本稿は研究分担者・社会学部遠藤由美教授（現関西大学）と共同収集した資料に基づくものである。
- 2) 以下も含め、性別を要因に含めた分析も行ったが、其の中には有意な性別の主効果或いは性別×年齢層の交互作用が見られたものもある。併し乍ら、本稿では性に依る相違に就いては平均値の呈示に止め、其れに関する記述は他日に譲り以下之を省略する。
- 3) 「厄介」では3クラス間に有意差は無い ($F(2,149) = 1.59$)。

引用文献

- Albert, S. 1977 Temporal comparison theory. *Psychological Review*, **84**, 485-503.
- Baumeister, R.F. 1998 The self. In D.T.Gilbert, S.T.Fiske, & G. Lindzey (Eds.) *The Handbook of Social Psychology, Vol.1, 4th ed.* McGraw-Hill. Pp.680-740.
- Harter, S. 1997 The development of self-representations. In W.Damon, & N. Eisenberg (Eds.) *Handbook of Child Psychology, Vol.3, 5th Ed.* Lawrence Erlbaum Associates. Pp.553-617.
- Heine, J.S., Takata, T., & Lehman, R.D. 2000 Beyond self-presentation: Evidence for self-criticism among Japanese. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 71-77.
- 広井良典 1992 アメリカの医療政策と日本 一科学・文化・経済のインターフェイス一 勁草書房
- Jackson, J.S., Antonucci, T.C., & Gibson, R.C. 1990 Cultural, racial, and ethnic minority influences of aging. In J.E. Birren & W. Schaie (Eds.) *Handbook of the Psychology of Aging, 3rd. ed.* New York; Academic Press, Pp.103- 123.
- 北山 忍 1998 自己と感情 文化心理学による問いかけ 共立出版
- 小池保子 1993 現代老人の生死観の多様性 川上武・小池保子・上林茂暢・庄司道子・梅谷薫 日本人の生死観 一医師のみた生と死一 勁草書房 Pp.33-64.
- Maukus, H.R. & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- 下仲順子 1980 青年群との対比における老人の自己概念 一世代差、性差を中心として一 教育心理学研究, **38**, 303-309.
- 高田利武 1992 他者と比べる自分 サイエンス社
- 高田利武 1997 自己概念の特質と形成 加藤隆勝・高木秀明(編) 青年心理学概論 誠信書房 Pp.31-49.
- 高田利武 1998 アジア文化における相互独立性 日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会発表論文集, 282-283.
- 高田利武 1999 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程 一比較文化的・横断的資料による実証的検討一 教育心理学研究, **47**, 480-489.
- 高田利武 2000 相互独立的一相互協調的自己観尺度に就いて 奈良大学総合研究所所報, **8**, 145-163.
- 高田利武 2001 自己認識手段と文化的自己観 一横断的資料による発達の検討一 心理学研究, **72**, 378-386.
- 高田利武 2002 社会的比較による文化的自己観の内面化 一横断資料に基づく発達の検討一 教育心理学研究, **50**, 465-475.
- 高田利武 2003 日本人成人の相互独立性 一クラスタ分析による類型的理解の試み一 奈良大学紀要, **31**, 213-233.
- 高田利武・大本美千恵・清家美紀 1996 相互独立的一相互協調的自己観尺度(改訂版)の作成 奈良大学紀要, **24**, 157-173.
- 内田満・岩淵勝好 1999 エイジングの政治学 早稲田大学出版部
- Wills, T.M. 1991 Similarity and self-esteem in downward comparison. In J.M.Suls & T.A.Wills (Eds.) *Social Comparison: Contemporary Theory and Research.* Lawrence Erlbaum Associates. Pp.51-78.
- Wilson, A.E., & Ross, M. 2001 From chump to champ: People's appraisals of their earlier and present selves. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 572-584.
- Wood, V.J., & Taylor, K.L. 1991 Serving self-relevant goals through social comparison. In J.M.Suls & T.A.Wills (Eds.) *Social Comparison: Contemporary Theory and Research.* Lawrence Erlbaum

Associates. Pp.23-49.

安川悦子 2002 現代エイジング研究の課題と展望 -文献解題を手がかりに- 安川悦子・竹高伸生(編著)「高齢者神話」の打破 -現代エイジング研究の射程- お茶の水書房 Pp.3-47.

Summary

The present study was conducted to shed light on the relationship between the developmental internalization of independent/interdependent self-construal and the attitude toward aging and death in Japanese culture. The respondents (n=969) were divided into 5 age categories from adolescence to aged group. They answered a questionnaire that measured (1) independent and interdependent self-construal, (2) self-esteem, (3) images of aged person, (4) attitude toward aging, and (5) attitude toward death. A cluster analysis of those variables revealed the following five types of respondents; (1) interdependence predominant type with low independence and low self-esteem in all age categories, (2) interdependence predominant type with low independence and high self-esteem in adolescent and young adult categories, (3) independence predominant type with low interdependence and high self-esteem in all age categories, (4) independence predominant type with low interdependence and intermediate self-esteem in adolescence only, (5) balanced type with both independence and interdependence and high self-esteem in adult and aged categories. While the attitude toward aging was negative in type (1) and positive in type (2), (4) and (5), type (3) showed a gradual change from negative to positive as the respondents get older. Regarding the attitude toward death, respondents belonging type (4) and (5) wanted a long life but type (2) and (3) did not display a desire for a longer life, while type (1) and aged respondents of type (2) and (3) showed a conflictive attitude concerning longer life and fear of early death. Based on those results, the author proposes a hypothetical model on the delay and advance of the self-construal development in Japanese culture.